

今月の谷口雅春先生のお言葉

お手伝いは子供の天賦の才能を伸ばす

子供の愛が溢れ出ようとする「今」を生かす

子供が、女の子なんかだとよく台所の仕事等手伝い
たくて仕方のないような時代があつて、怪我でもしそ
うな危つかしい手附でままごとみたいなことをしたがつて
仕様のない時がある。こういう時は子供の生命が出よう
出ようとしている時である。その出ようとしている生命
を出るよう出るように導いてくれる母親があれば、そう
いう母親に育てられる子供はどんなにか幸福だろうかと思
います。(中略)

「今」生命が溢れ出して「こうしよう、こうしよう」「こ
うしたい、こうしたい」と、樹木の新芽のようにまさに
内部から溢れ出ようとしている時に児童の生命を生かす
というふうにしたならば、人間の内部に流れている能力
が充分に発達するのです。この何となく母親の台所仕事
の手伝いなんかしたいという時には、単に能力が発現し
ているだけではなしに、愛の心が動いている、自分から
して、母親を喜ばして上げたい、という愛の心が起つて
いるのだけれども、親の方では実用一点張りで、そんな
愛を受けたって時間がかかるばかりである、邪魔になつ
て却って仕事が運ばないと、愛の心を功利的価値で計算

して、実用一点張り、経済向き一点張りで片付けてしまおうとする。こうなると、折角愛の心で「親達の手助けをして上げたい」という生命の働きが動き出そうとしている時に、その生命を押し込めってしまうという事になる。そして、青年期になってからその子供に「ちょっと私の手伝いをしておくれ」といっても、もうその子供は手伝いをする喜びを、その最初の芽生に於て摘まれてしまっているのです。折角「出よう、出よう」「手伝いしたい、手伝いしたい」と生命が芽吹いている時に「邪魔になる。うるさい！ あっちへ行っておれ。」こうやられたものだから、今度実際に手伝って欲しい時、大分子子供も成長して能力が出来たとき手伝って欲しいと思っても、「何だ、母さんったら利己主義だわ」ということになって手伝わない不親切な子供が出来る、子供の心は、親の心の影だったのであります。（新編『生命の真相』第44巻24～28頁）

子供を褒めながら才能を伸ばす

子供をその天賦の才能の方向に伸ばす為には彼に手に負った仕事を与えねばならない。

子供に仕事をさせてはいけないというのは謬見である。適当な分量の仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は生命を建設的に使用する方法を教える。そして子供の生命のうちに建設的な傾向と創意的な傾向とを育てあげる。

建設的傾向——これは才能の発達の土台石となるものだ。この傾向が強ければ強いほどその人間は生長する。幼時に培われた傾向は生長してから養成した傾向よりも力強く根を張るのだ。

だから、幼時より生命を何か建設的な方向に鍛えることが必要である。それには大なり小なり仕事を与えなければならぬ。

特に小児自身の好む建設的な仕事を与えるのは好い。しかし、好きな仕事でもあまり長時間又はあまり多量に与えてはならない。分量が多すぎると、どんな仕事でも

しまいには面白くなくなる——そして仕事というものは退屈なものだという先入観念を抱かせるようになる。

善い言葉で暗示を与え、子供を充分信頼してやり、仕事の種類と時間とを子供の好きにまかしてやるならば、

子供は滅多に仕事の選択に失敗するものではない。

子供を信ずること、及び善い言葉で「あなたは善い子だからこれが上手だ」というふうに導くことを忘れてはならない。
 (新編『生命の真相』第22巻86～87頁)

「愛は感謝を受ける」という喜びの実感

子供の手助けを真に喜んで感謝してやるようにすれば、子供は「愛は感謝を受ける」という事実を体験する。

喜ばれることがどんなに嬉しいかということを経験する。これは人間の正しい生長に必要なことである。(中略)

親の利益を標準とする時、子供の不完全な仕事は親をイライラさせるものである。子供は仕事をしたために喜ばれるよりも嘔鳴り付けられるようなことがある。それ

はやがて仕事に対する興味を失わずことにもなり、子供自身は愛の心で手助けしたことが感謝で報いられないことにもなり、情操教育の点から甚だ面白くない結果を来たすのである。

その上、親の手伝いを主眼とするとき、必ずしも、子供を天賦の才能の方向に生命を習練さすことにならないかも知れないのである。だから、最初に子供の天賦の才能を、その子の器用さによって看破し、巧みに導いて子供自身の選択によるような形にして、その器用さを発揮するような仕事を与えるのが最も好いのである。

子供は自分の選んだ仕事だから喜んでする。しかし、それが天賦の才能ある方面の仕事であるから、すればする程上達する。喜んでする仕事だからエネルギーが浪費されない。それを親が賞めてやる。感謝してやる。こうすれば子供の天才を発揮する上からも、愛の人格を養成する上からいっても実に好いのだ。

(新編『生命の真相』第22巻88～90頁)